雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

平成５年２月26日
気　　象　　庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

雲仙岳では，昨年12月３日頃から第９ドームが，また，本年２月２日頃からは第10ドームが成長を始めた。

火砕流は，昨年11月中旬以降少ない状態が続いているが，12月20日には水無川方面に約４km流下し，また１月15日には数時間にわたり赤松谷方面へ多数流下した。さらに，第10ドームからは北方及び南西方向へも溶岩の崩落や火砕流が起っている。

目視観測等によると，これまで減少してきた溶岩噴出量が２月に入ってやや増加し，日量10～20万m^3になっていると推定される。

山頂部の地震活動が２月に入ってから低下したが，これは溶岩が抵抗なく噴出していることを示していると思われる。普賢岳周辺の広域地殻変動については，収縮が停滞した。山頂部では，鈍化しつつも膨張が続いている。また，地磁気の消磁傾向も依然として続いている。

このように，長期的に見れば火山活動に低下傾向が見られるが，新しい溶岩ドームの出現，火砕流の発生等，火山活動は消長を繰り返しながら依然として活発な状態にあると考えられる。特に第10ドームが地形的に不安定な成長を続けていることから，大きな火砕流も含め，今後も火山活動に厳重な警戒が必要である。

なお，降雨による土石流にも引き続き警戒が必要である。